



『學園新聞』 昭和7年7月15日号 「九回美術工芸展覧会」公報

(自由)『學園新聞』『美工』欄
「我等の美術にルネッサンスを」

九回美術工芸展覧会 愈々近づく

愈々近づく
自由學園の繪に「型」が出来始めたと言われてから、なかなか抜けきれないで三、四年たちました。私達は今また新たにその事を思ひ直して見て、今年こそどうかして破りたいと思ひます。ルネッサンスを来たせたいと望みます。過去にあつた良さの復興だけでなく、新たな良さの誕生こそ、私達の俟ち望むルネッサンスです。

私達はどうしてもそれを来たらせることが出来るでせう。やはりどんな描いたり作つたりしなければ美術は進歩しないでせう。心を潜めて、私達にどういふことが足りなかつたかを反省すると同時に、手も身体も働かせてどん／＼業を行つて、形に表はして、先生方にも世の人にも見ていただきたいと思ひます。それによつて教へられ又進みたいと思ひます。さういふ所からいつて私達は先づ今年の展覧会の形を整へることよりも、元気の充ち溢れた今生れたばかりのもののやうな新しさをもつた繪画・彫刻・工芸品等で一杯にしたい。

それで実際に當つて、私達の努力をどういふ方向に向けて行つたらよいでせうか。此の間、ニュースに送るために新東京風景を描いた時、みんながこういふことを感じました。〃私達の描いたビルディングは可愛らしくてフワ／＼してゐる〃と。今まで私達が描いてゐた絵は自由で厭味がなく感じてよいと云はれてゐましたけれど、ただそれだけでは物足りない気がして来ました。學園のクリーム色の壁、青々とした芝生、楽しげなお友達の顔、親しみの多い南澤(*)の松、そして夏休みにはきれいな海や山の景色が、私達の好んで描く題材でした。私達はさういふものを描くだけに止まらず、もつと大きい、堅い、烈しい、近代生活の風景をもどん／＼描いて、それ等も自由に表はし得る程、私達の腕を丈夫にしつかり育てて行きたいと思ひます。力の弱さ、不確かさ、突つ込み方の足りなさ、さういふことを感じた私達には、遠近法や明暗のお話が実により刺戟になりました。絵はかたくならないで自由に描く方がよいと云つても、自然に放つて置いては進歩しません。愈々描き始めた後は何もかも忘れて、一生懸命に描くにしても、心構へはしつかりしなくてはならないと思ひます。やはり苦しまなくてはだめだと思ひます。

工芸の方にも同じ気持で当りたいと思ひます。今までより一層實質を高めるにはどうしたらよいか、私達は工芸品を多量に生産して市場に出したいと思つてゐますが、今それをするのは適當でないと思ひます。成績品とも商品ともつかない中途半端なものにならないやうに。

昨年は少しさういふ現象が現はれたやうでしたから、今年は製作力をぐ

つとおさへて、生産的な意味の展覧会は工芸研究所の計画にお任せして、他の機会に他の方法に譲りたいと思ひます。といつても皆が力一杯出せば会場には力強い作品が溢れる程並べられるにちがひないと思ひます。出来たものは成績品でも売りたいと思ひます。展覧会のために描いたり作つたりするのでないことは勿論ですが、十一月の展覧会を期して私達の一年間半の美術の決算をすることは大きな励ましになつて嬉しいことです。

方針と具体案の相談会

今年の展覧会を本當によいものにする為には、その方針も準備も美術の先生方と最初の出発点から、欠落なく御相談し協力の上に立つて、よい指導をして戴き度いと願ひ乍ら此の会を始めました。

第一の問題 此の展覧会をどう云ふ方針でするかと云ふ事で、今年は學園挙げてよい作品の製作者になり度い、そしてその成績に添ふ展覧会にし度いと云ふ私達の願ひに、美術の先生方全員賛成でした。

そしてその成績品は適當な値をつけて売品にし、その他に展覧会の賑やかな背景となる様に大量の売品を工芸研究所から出すことにしました。この方針でするならば、私達の今迄苦心して来たよい成績品を出し度いといふ事と、それを出来るだけ大量生産し度いといふ二つの願ひがきつと両立する事が出来ると思ひます。

第二展覧会の内容 工芸の製作品を、家具、服装、小工芸品、玩具と分け

て、各部で凡そ考へて来たものを表にまとめて見て驚きました。作る種類

の事、数についてそれ／＼注意や批評を伺った中に、山本鼎先生が工芸品を作るのも一つの勉強として、よい指導のもとに一つ／＼価値のあるものを作つて欲しい。玩具にしても作品はちゃんと選んで統制のあるものにして度い等の御注意は、私達の勉強に忘れてはならない事だと思ひます。

絵画は、今度の展覧会こそと、皆で期待をかけ熱心に意気込んでゐますが、今迄どうして沈滞してゐたのかと云ふ事は勿論私達一人一人の責任ですが、その他に絵の勉強方針は工芸の様にはつきりと組織して準備出来なかつた事も大きな手落ちであつたと思ひ、今度は是非絵の勉強方針をはつきり立て、描きに行く所、その時間等もよく考へ、又先生方の厳しい批評も喜こんでどし／＼受けて、真剣に勉強してゆき度いといふ事を話しました。——それについて先生方がお話しして下さつた。大切な急所を皆でよく考へ各反省して見度いと思ひます。

山本鼎先生「皆は、殊に一年生は絵を勉強だと思ふ事が足りない様に思ふ。少し遊び半分の所がある。けれどそうかと云つて楽しんで描いてゐる様には見えない。又皆の物の見方が足りない。先づ目的物をしっかりと見て正しく描かなくてはいけない。小さい人は描くもの許り選んで、まだ／＼努力が足りないからだ。」

木村莊八先生「第一に皆さんの絵に表情がないのも、その絵がはつきりしないことです。絵に描くものをよく見ると各々のものに透明、不透明がある。例へば風景の絵がある。これに描かれてゐる空と、山と、海は各々透明さがちがふ。山は最も不透明で、空と海とは同じ水色だが透明さが違ふ。

空は鳥でも何でも自由に飛べる。軽い、そしてどこまでも続く広さ、深さ、清らかさがある。海も透明だが、大きな、舟でも浮かべる力強い力がある。その様にもものを見て描いた時には、その絵にはどうしても表情が出てくる。第二に、白いものを描くとき、紙の白さを使うのが最もよい。白い花でも胡粉で描いたりしては、あの美しさが重くるしくなる。こんな場合には紙地をそのままのこしておいたらよい。

次にどんな立派な絵でもその奥行、明暗を考へないと駄目になつてしまふ。明暗を作るのには、どの方向から光が来るか考へなければならぬ。一本の樹木を描いても、その木の枝と枝の間に空間がなくペツタリしてゐては、その絵に奥行がないことになる。私達も一枚の絵を描くにしても唯描くのではなく、充分の注意を持つてよく考へて描かなければならぬ。」

自由學園…クリスチャンで思想家・羽仁もと子、羽仁吉一夫妻によつて、大正十年(一九二一年)四月にキリスト教精神(プロテスタント)に基づいた理想教育の実践を目的として、東京府北豊島郡高田町(現在の東京都豊島区西池袋二丁目)に設立された。学校名は、新約聖書『ヨハネによる福音書』八章三二節「真理はあなたたちを自由にする」からとられた。学生は学園内の寮で生活し、自勞自治の精神に基づいていた。文部省の学習指導要領にとらわれない独自の教育方法で知られていた。

*南澤の松：校舎が手狭になり、昭和五年から北多摩郡久留米南澤
(現東久留米市学園長)に校舎・施設を移転する。

自由學園と春陽会：昭和元年(一九二六年)から昭和十二年(一九
三七年)迄、春陽会の足立源一郎、石井鶴三、木村莊八、山崎省三、
山本鼎が自由學園から委嘱され教師を務める。『春陽会七〇年史』